

科学の詩（続）

——〈仮面〉を打ち貫く

森 田 孟

今一度、本誌前々号（第二三二号、二〇一五年六月刊）の拙稿に続いて、あの詩華集——社会が宇宙をどのように認識してきたか、その変化の姿を、英語詩人たちの表現を通して吟味しようとした——『科学の詩』*の中の、宇宙の概念や心象に対する詩人たちの関心がその主題に反響している佳什から、新たに十七篇選んで見てゆきたい。

* *Poems of Science*, edited by John Heath-Stubbs and Philips Salman, Penguin Books, 1984. 本稿の各作品末の（ ）内数字は、その収録箇所を示すページ。

まず、エリザベス女王の宮廷における花形宮廷人として活躍した文武両道の才人、サー・フィリップ・シドニー

(Sir Philip Sidney, 1554—86) の作品である。

イングランドの七不思議

The 7 Wonders of England

爽やかなウイルトンの近くに、巨岩の塊が多数見つかつているが、甚だ乱雑なので、誰の眼にも、正確には数えられず、理性では理由が判らない、どのような力で、あれ程の思いも寄らない姿で大地に現れたのか。

もっと不思議な重圧に私の心の荒れた土壌は縛られている

情熱の丘陵から理性の空へ届こうとして

空想の大地からあらゆる数量の領域を通過して

あらゆる推測を通り過ぎて、そこから私の中に飛んでき

た筈だ

甚だ混沌とした塊が、あるいは私の中でそれが生長す

るものなら

単純な魂が甚だ種々雑多な災難を引き起こすことだろ
う。

ブルアートン⁽²⁾家は〈湖〉を所有しているが、それは〈太

陽〉が

暖めてゆくと（他ならぬ）死んだ丸太を浮上させる、

隠れた深みから、捧げ物なのだ。それが終る時の、

嘆かわしい印^{しるし}なのだそれは、〈主〉の最後の糸が紡がれ

るのだ。

私の湖は良識で、その静かな流れは決して走り出さない、

しかし私の〈太陽〉がそこで彼女の光輝く双子を屈服さ

せると

彼の深みからは彼女の中で始まっていた力が働いて

長らく沈んでいた希望の数々が涙がちの両眼に与えられ

ることになる、

しかしそれが巧くいかない時には、私の死んだ希望が

頭をもたげ、

彼らの主人は公平にも思いどおりにするよう警告され

る。

我らには魚⁽³⁾がいる、他所の人々には大いに賞讃されている

が 捕獲されると主な部分を残酷に探索される、

（胆嚢は切り取られて）再び技術によって閉じられるが

生きてはいる。その生命が新たに求められるまでは。

もっと不思議な魚。私自身は。まだ息を引き取っていない

尤も美女の鉤針にうっとりして、私は授けたのだが

私自身を要望された〈解剖〉に、

胆嚢の代りに彼女に委ねたのだ。私の心臓を、

それでも様々な想いは閉ざし込んだまま生きてゆこう

彼女が

征服の権利によって探索の代りに殺そうとするに到る

まで。

尖^ヒつた山頂^クに（洞窟^ク）がある、その狭い入口は内部に

大きな部屋部屋を見せており、そこに雫が激しい勢いで

滴^ヒり落ちてゐる、

漂礫^ヒ土が冷気で編^ヒまれてゐる、唯そこには未知のものが

そのまま残^ヒつていて、

その見窄らしい場所を（雪花石膏^ヒ）で裏打ち飾^ヒつてゐる。

我が眼 真直ぐなもの、広々とした洞窟、我が心、

その曇りのかかった諸々の思索が降らせる内部の雨は

悲しみの雫から成り、遂にはもつと冷たい理性が 雫の

落流を縛^ヒつて真実の絶え間ない水脈にし、

純粹な（雪花石膏^ヒ）より遙かに増しなものにする、

それは軽蔑はされてもそれでもやはり真実は持ちこた

えるのだ。

あそこの平野^ヒは、もし杭が大地深く

打ち込まれるなら 地中で受け取^ヒつていたものが

硬く、冷たく、重い石に変えられてゐると分る所で

その上の森は間もなく朽ちてゆくがままになるだろう。

大地 その穂、あの杭は我が懇願するもの、

そのうちのどれ程多くが貫き到れるものか、あの安楽な

席に

名譽へと向かつて、名譽の巢に住みつくことに、

あの形状は保ちながら、いつもの熱は無くして、

しかしその他の全ては、恐怖も敢えて働きかけなかつ

たのだが、

自らを裏切り、良心が衰えて死ぬのだ。

船については、アルビオン^ヒの海岸に難破して打ち上げられ

岩々の上で朽ちてゆきながら 各々の死を遂げる、

木製の骨格から、そしてピッチ^ヒ状の血のせいで

鳥^ヒは飛び立ち 船が失つた以上の生命を得る。

私の船 欲望は、長らく情欲の風に揺さぶられながら、

確固たる貞節の美しい裂け目で崩れた、

そこでは向こう見ずな試みに苦しめられて彼の亡霊もお

手上げとなり

美徳の海深くに 美女たちが横たわつてゐる。

しかし彼の死でこの上なく純粋な愛が飛翔し
それ程ではなく見えながらもやはり一層気高い生命を
動かすのだ。

以上の不思議をイングランドは産み出すが、最後のものが
残っている、

一人の〈貴婦人〉が、清らかな本性はともかく
その上にあらゆる人が愛を注ぎ、その中には愛は全く位
置を占めない人が、

そこでは公明正大さが 叡智の最も短い雨に応ずるのだ。

慎しやかな誇り、好意を傷つける軽蔑、

婦人の鑑かがみ、だが倒された〈天使〉のようなのだ、

〈天使〉の心、だが婦人の中に鑄造されたもの、
地上の天国、いや 天国を内包する大地だ、

今やこうしてこの不思議を 私は心に思い描くのだ、
彼女は 私がその他の全てでいられる原因なのだ。⁽¹⁰⁾

(六九—七〇)

訳注

- (1) huge heaps of stones = Stonehenge [イングランド Wiltshire 州の Salisbury 平原にある紀元前一七〇〇—一二〇〇年頃の巨大な環状列石から成る] その数を数えるのは困難、もしくは不可能と信じられているのは、他の石の円周遺跡にも関連している (原著注、三二六)
- (2) *Bruertons* この伝説は、Cheshire で十九世紀まで存続した *Breton* 家の所在地と関連していた (同)
- (3) fish 'pike' 「カワカマス」が、この特質を備えていると信じられていた (同)
- (4) *Cave* おそらく *Buxton* 近くの *Poole's Hole* だろう (同)。Poole はイングランド Dorset 州南東部のイギリス海峡に臨む都市
- (5) *Till* 漂石粘土、氷河の流動によって削り取られた岩屑が運搬され堆積し、泥、砂、礫などの混じ合ったもの、固まれば "tilite" (漂礫岩) になる
- (6) *A field* *Holmshed's Chronicles* (1577 年完成、1587 年増補、p.130) によると *Windburne monastery* (現在の *Wimborne Minster*) 近くの森が、この石化させている森の特質を持っているといわれた (原著注、同)
- (7) *Albion* *Great Britain* 島の古名で、「白い土地」の意。この島の南部海岸をドーヴァー海峡から眺めると白亜質の絶壁が白くみえるので
- (8) *pitch* コールタール、木タールなどを蒸留した時に残

る黒く、よく固まる粘性物質

- (9) A bird the barnacle goose 「ロクガン」その起源への
の信仰は、様々に説明されてきており、十三世紀まで遡
れる（原著注、同）

- (10) She is the cause that all the rest I am. = She [A Lady]
is the cause that I am all the rest. 「彼女」と「う不思議」
が居て下さるお陰で私は彼女の上述のような美徳が全く
無くても存在していられるのだ」

行頭に三通りの変化があるものの、全て十音節詩行で、
A B B A の型で押韻する四行詩と、A B A B C C の型で押
韻する六行詩とが交互に七回ずつ繰り返されながら、「七
不思議」なるものを列挙して、その最大のものとして、他
者の愛は一身を集めるものの自分から他者を愛することの
ない、清らかな本性の一人の貴婦人「おそらくエリザベス
女王」を讃えた作品である。

牧歌風のロマンスをソネットの連作で詠った『アルカ
ディア』や、詩論の名作『詩の弁護』の作者であるこのシ
ドニー卿は、対スペイン戦争に出征してオランダのズート
フェンで戦傷死したが、その際、「君の方が私よりやはり
ずっと必要だ」(Thy necessity is yet greater than mine)

と言って、重傷の兵卒に水を譲ったという話が大変有名で
ある (Sir Fulke Greville, 1554—1628. 『シドニー伝』)。

次は、穏健な清教徒で有能な政治家でもあった形而上詩
人、アンドリュー・マーヴェル (Andrew Marvell, 1621
—28) の有名な一篇。

愛の定義 The Definition of Love

私の〈愛〉は稀な生れで

不思議で高尚なものへのものと同じ、

それは生まれたのだった 〈絶望〉によって

〈不可能〉が条件で。

寛大な〈絶望〉だけが

私に示してみせたのだ これ程神聖なものを、

か細い希望ならとても飛んでゆけなくて

唯 空しくその金びかの翼を羽搏けたにすぎまい。

それでも私は素早く到達できたかも知れない

私の伸び広がった魂が据え付けられた所に、
しかし〈運命〉は鉄の楔を打ち込んで
常にそこへ間をぎつしり詰めるのだ。

何故なら〈運命〉は嫉妬の眼で 二人の

完璧な愛し合いを見て 彼らを近づけないからで

彼らの結合は彼女の破滅となり

彼女の暴君の力を退位させることになるうから。

それでそれ故 彼女の鋼鉄の命令が

我らを遠く離れた両極端として据えたのだが

(尤も〈愛〉の全世界は我らの上を旋回しているのだが)
命令自体によって抱擁されるわけもない。

もしも目も眩むような天空が落下して

大地を何か新たな激震が引き裂かないなら

我らを結び合せるために、世界はすっかり

球体平面図の中に閉じ込められることだろう。

線はいずれも、そう 愛は斜めなものだが、それら自身

どの角度でも迎え合つて当然だが、

しかし我らの愛の線は、とても本当に平行しているので
限りないものではあるが、決して交わることはない。

それ故 我ら二人を縛っている愛は

唯〈運命〉は甚だ妬ましげに妨げはするが

心の結合⁽¹⁾であつて

星々の対立⁽²⁾なのである。

(一一〇—一一)

訳注

(1) conjunction 天文では「合」^{あひ}。二つ(以上)の天体が同

じ黄経 (Celestial Longitude) 上にある状態

(2) opposition 天文では「衝」^{しやう}。惑星または月が地球に対し

て太陽と正反対の方向に来ること

八音節の詩行四行が、A B A B の型で押韻する八連総計
三二行の作品。不可能だとして絶望の果てに生まれるもの
だという〈愛〉というものの逆接的微妙な性質が、如何にも
形而上詩人らしい機智により、天体の譬喩を使って精緻

に捉えられていよう。

一気に十九世紀のアメリカに飛んで、文人としては最も科学精神に富んでいたエドガー・アラン・ポウ (Edgar Allan Poe, 1809—49) のソネットである。題してすばり

科学く To Science

科学よ！ 〈古代〉の真正な娘だ汝は！

自らの凝視する眼であらゆる物を変えるのだ。

何故汝はこのように詩人の心臓を餌食にするのか、

ハゲワシなのか、その翼が鈍い実体の？

どのように彼は汝を愛すれば、それとも賢いと思えば、い

いかか？

彼が 宝石だらけの空に宝を探し求めて

彷徨^{さまよ}うままにさせておこうとしないのだから、

尤も彼は怯むことのない翼で飛翔したのだが。

汝はディアーナ⁽¹⁾を 乗っている車から引きずり出さなかつ

ただらうか？

そしてハマドリユアデス⁽²⁾を森から追い出して

どこかもつと幸福な星に避難所を探さなかつただらうか？

汝は引き剥がさなかつただらうか ナイアデス⁽³⁾を巻き込

まれた洪水から、

エルフ⁽⁴⁾を緑の草から、そして私から

あのタマリンド⁽⁵⁾の木の下の夏の夢を？

(11011)

訳注

(1) Diana 古代ローマの月の女神、女性と狩猟の守護神、

ギリシャ神話のアртеミス (Artemis) に相当

(2) Hamadryad ギリシャ神話、木の精

(3) Naiad ギリシャ神話、川や泉に住む美しい少女の姿を

した水の精

(4) Elfm 小妖精

(5) tamarind 熱帯産のママ科の常緑高木、アラビア語の原

義は「インドのナツメヤシ」

「汝」は無論全て「科学」を指す。が、科学を「ハゲワ

シ」(Vulture) なのかと譬えたせいでそのイメージが「彼」

(詩人) に乗り移って、後半の「汝」には詩人も重なる趣

の十音節詩行の十四行が、A B A B C D C D E F E

FGGと押韻する。

次は、『白鯨』(Moby-Dick or The Whale, 1851)の作者
ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819—91)の作
品である。

太陽への新たな熱狂者

The New Zealot to the Sun

ペルシャ人よ、君は立ち上がる

犠牲の風土から燃え立って

そこでは追従者どもが訴え、

ひれ伏した男は恥じ入った表情で

儀式に執着する その趣旨はこれまでの

崇拜の足跡を辿ることだから。

弧状の支配、

相応しくも君の君臨する光線を

君はアジアの平原から投げつける、

そこからは閃光のようにきらめくのだ 広範囲に渡って

無数の野蕃な侵掠軍団の投げ槍が

それはなかなかの羊飼いかイン⁽¹⁾に率いられていた。

がんがん鳴り響く恐怖の真只中に

神々もまたやって来た 征服者として君のインドから、

ブラフマ⁽²⁾の仲間が繁栄した、

彼らは同じように大鎌付きの車へとやってきた、

西方へと彼らは自らの帝国をはるばる転がしていった

夜分に 自らの紫衣を織り上げた。

化学者よ、君は育てるのだ

東洋の風土の中に各々が魔術に使う雑草を

それは夢に精力を与える——

運ばれ、広められているのだ 神話と信条の中に、

天女たち⁽³⁾の中に地獄に、精神錯乱の長談義が

そしてカルヴァン⁽⁴⁾の最後の極端が。

たとえ君の光が 時代の

最初の夜明け時に無理やり

〈カオス⁽⁵⁾〉の仰天した一族を逃走させることはあっても

君の投げ放った矢の全てが追い払うことは決してないので

はないか

こういう雑草から人間に跳びはねてきた

もつと悪質な（無政府状態）、欺瞞、憂慮を？

しかし〈科学〉はそれでも

更にあり余る程の発散物を産み出すだろうし、

君の作用の及ばない力が――

君には打ち負かせられない亡霊（シェイクスピア）を鎮めることだろう、

そうだよ、秘密を悉く探し出しながら

君の光線を解明するだろう。

(二一七—一八)

訳注

- (1) Cain アダムとイヴの長男で、弟アベル (Abel) を殺害した、「創世記」四章
- (2) Brahma = Brahma 梵天、後期ヒンドウ教の最高神。保持神 (Vishnu)、破壊神 (Shiva) と共に三神一体 (Trimurti) を成し、その第一
- (3) Hours イスラム教の天国で、信仰深い教徒に与えられる美しい処女、あだっほい美女
- (4) Calvin John, 1509—64. フランスの神学者、スイスに

おける宗教改革者、異端に火刑をもって処したことなどにメルヴェイルは言及

- (5) Chaos ギリシャ神話、カオス（混沌）を象徴した神、ヘーシオドスによると、天地が出来上がった時最初に生れたのがカオスで、カオスから「暗黒」の神エレボス (Erebus) と「昼」の神ヘーメラール (Hemera) 及び「夜」の神ニュクス (Nyx)、「上空の輝ける空」の神アイテール (Aether) が生れた

順に音節数が、4 8 6 8 8 6 の六行が A A B C C B の型で押韻する六行詩六連の詩。よく知られるように、メルヴェイルのゾロアスター教 (Zoroastrianism) ——紀元前六〇〇年頃、古代ベルシャでゾロアスターが創設したと言われる啓示による最古の宗教、最高神はアフラ・マツダ (Ahura Mazda)、聖典「アヴェスタ」(Avesta)、宇宙史と人類史とを善霊 Spenta Mainyu と悪霊 Angra Mainyu との戦いの歴史と捉える二元教で、火の祭儀を特徴とする故に拝火教とも呼ばれる——への関心が顕著な作品で、彼の博識と強烈な想像力が駆使された。この詩は彼の最後の詩集『ティモレオン』Timoleon (1891) に収録されている。

次は、英国の詩人・評論家・教育家マシュー・アーノル

4 (Matthew Arnold, 1822—88) の一篇である。

『エトナのエンペドクレス』から

From Empedocles on Aetna [and Other Poems (1852)]

世界を満たしているもの全ては

唯一つの物質から紡がれているので

不満を述べる我々はやはり共にいることになる

我々が或る者のことで罵っている事柄と、

過度に駆使されている〈権力〉の所有者のことだが、その

権力は〈大地〉と〈大空〉と〈大海〉の

幅と長さ一杯に

人間と植物と岩石に及んで

永久に骨折り仕事をし

奮闘し、喘ぎ、呻いている、

全ての事柄が巧く為されても当然だろうが、時には力の点

でしくじることもある。

そして約束の時間どおりに正確に

この宇宙の〈神〉は

どの行為に向かう場合とも同様に

頷かれるといつも仕事を続行して

辛抱強く己自身への呪いを声高に非難する。

これは〈人間〉が嫌悪するものではないが

それでもこれだけは呪えるのだ。

厳格な〈神々〉と敵意をもつ〈運命の女神〉は

夢につぐ夢、これが唯一それだ、

どこにでも存在し、支えているのだ 賢者を、愚かな小妖

精を。

それだけではない、どこか他所で

非難させるつもりで

我らは意のままに造り出すのだ

気配りをする厳しい〈権力者たち〉を、

人間生活を苦しいものにするために底意地の悪い〈造物主

たち〉を。

しかし、次には、我々はひっくり返すことだろう

我ら自身が紡いできた組織を、

そして我々が呪おうとして造ったものに

我々は今 寄りかかろうとする、

そして人間が虚栄心から試みるものを完成させる親切な

〈神々〉の振りをするのだ。

見たまえ、世界は我らの眼を誘う、

それで我々はそれを全て知ることだろう。

我らは星のきらめく空の地図を作る、

我らはこの 土で出来た球体に留意する、

我らは海の潮流を量る、我らは海の砂粒を数える。

我らは精査する 遙かに

過ぎ去った人事の日付を

抹消された領土の境界を、

死去した王たちの家系を、

我らは死者たちの言葉と 死者たちの手になる仕事を探索

する、

我らは眼を閉ざし、思いに耽る

どのようにして我ら自身の心という心は造られるのか、

どのような思考の泉をそれらは使うのか

どのようには是正され、どのようには欺かれるのか、

だから費そう 我らの才智を 名付けられずに大半は用い

るものを名付けるために。

しかしそれでも、我らが仕事を続行するうちに

その数量はますます膨らんでゆく

これから読むべき書物が、

これから探究すべき秘密が、

我らの髪は白くなってゆき、我らの眼は霞み、我らの熱は

弱まってゆく――

我らは己の能力を停止して

このように〈神々〉に呼びかける――

「真物の〈科学〉がもし在るものなら

それは御身の住み処に留まっているのです、

人間の尺度では限らない〈全て〉を測ることは出来ません

あなただけが見て取れるのです

世界の広大な企図を。

私たちの闇雲の探索は罪です

それを今後は私たちは断念します

確かなのは唯、あなたの心が 降りかかってくる全ての事柄を御覧になるといふことです。」

(二二〇—二二)

エンペドクレース (c492—c432 B.c.) は、シチリア島のアクラガス生れで、人間の経験する生成から消滅までの変化を考究したギリシャの哲学者・政治家。人間としてではなく神として崇められることを目論んで、エトナ山の噴火口に投身自殺したと伝えられる。この哲学者に思いを到しながら、科学も結局は神の分野だと表明する作品である。

人間の闇雲の探索は罪だからこれを断念する、などと言うが、科学の否認では無論ない。却って科学への可能性を期待させる余韻が心憎いだらう。六音節詩行四行と十二音節詩行一行との一連五行が、A B A B C の型で押韻する詩行十二連から成る。尚、各連の五行目は第一連と第二連、第三連と第四連…第十一連と第十二連が押韻する仕組になっている。

アーノルドに負う文芸批評用語は少なくないが、厳肅な主題を述べる際に用いられる文体としての「莊重体」“Grand style”と、調和の取れた人間の全面完成を追求する教養が備えるべき二つの本質的な性質としての「甘美と光明」“Sweetness and light”は特に有名であろう。

すぐ続く、ロヴェントリー・パトモア (Coventry Palmore, 1823—96) の作品が現れる。大英博物館に二十年勤め、テニスンやラスキンと親交を結び、「ラファエロ前派」の人々と知り合って、その機関誌「芽生え」*Germ* に寄稿した英国の詩人である。

二つの砂漠 The Two Deserts

ひどく畏怖の念に打たれたりはしない 私は
我々自身のものの彼方に五千もの天空を

見つけ出せるのだと学んでも
天体の中で知られている

最上のもののせいでそれらの評判は余り上がらないのだ。
よくよく見られると、〈月〉の美しい球体は
不吉なものの中でも最悪だ、

〈夜の〉公道の死体、裸で、火傷を負って、呪われていて
それで今や分るのは

〈太陽〉が煮詰めて破裂させたのが見てとれるだけで
地獄としても恐ろしすぎるといふことだ。

それで、これら二つのことから判断して
我らが納得せざるを得ないように

〈宇宙〉は、我々の生きている〈地球〉の外で、
全て〈造物主〉の楽しみの中に孕まれており

その時に予測したのだ 〈人間の〉深遠な精神を、
肉体を卑小にする程のを。

〈望遠鏡〉は捨てよ！
それが無い方が人間にはよく見えるのだ

静まり返った深夜に恐ろしいまでに手足を伸ばした
人間の永遠の亡霊が。

私に与えたまえ あのもつと気高い眼鏡を 我らの身近に
横たわる事物を眼へと膨張させてくれるあれを

遂には〈科学〉がうっとりしながら歓迎するのだから、
極く微細な水滴の中に

厄介の種となる数えきれない程の尻尾も。
こういうものは少くとも生きています。

しかしどちらかというとならないのだ

心には 余り多く覗き見るものは
我らの素晴らしく美しい地所の彼方までなどは

度合に大小がないこれら砂漠の間にあるので。
不思議なまで見事だ 我ら自身の御機嫌取りたちは

我らの眼をどうしても捉えてやまず
明らかな道から外れて

遠くへ彷徨ったりは決してしないのだ。

(一一二)

殆どが二行連句の三五行で各詩行の音節数は四〜十二と
自由で幅がある。「〈望遠鏡〉は捨てよ！」がいい！ 人間
の永遠の亡霊などは〈心眼〉の領域である。「二つのこと」
とは、月の美と月の醜の両方か、観方によって見え方が異
なる事情への改めての注意であろう。砂漠に譬えらえてい
る二つが漠然としていて読者の眼と心を澄まさせるとこ
ろ、面白い作品である。

次に、マチルダ・ブラインド (Matilda Blind, 1841—96)
の作品をみてみたい。英国の詩人だが、ドイツのマンハイ
ムの銀行家の娘として生まれ、一八四九年頃ロンドンに出

て来て、掲出の詩集（一八八八年刊）などを発表した。

『人間の上昇』から From The Ascent of Man

戦争が猛威を振う 肥沃な地上で、

激烈で血に飢えた戦闘が

始まる 各々新たに生命あるものが誕生すると、

恐ろしい戦争だ 巨大な力が正しい所、

やはり最強の者が殺戮して勝つ所、

弱さは罪でしかない所。

この延々たる戦いに休戦はない、

終つても再び始まるしかない、

血の滴り、しわがれた死喘鳴、

憤怒の咆哮、苦悶の金切り声が

この上なく美しい小森 小谷で 溢れ返り、

大地の花咲く繁殖地を地獄に変える。

地獄の如き飢餓、憎悪、情欲が

生きとし生ける者悉くをここへと低く駆り立てる、

かと思へば アシナシトカゲが土中で跳き、

かたやペンギンは（極地）の雪の中で、

正に地獄そのもの 救われるものとてなく

生命は生命の飽くこと知らぬ墓場なのだ。

そして長い不吉な桁外れの敵対のうちに

類型は却火に依る程までに試練にさらされ

そこでは生命は生命で研がれて

喘ぎながら一歩また一歩高くへと登ってゆく、

類人猿は毛深い両腕を上げながら今や立ち上がり

はつと目を奪う働きをする手を自由に解放する。

彼らは明るい空中生活用の家を建てる

広く枝を張った木々の柱身の上に、

そこでは、用心深く身を隠しながら、各々の連れ合いが

小さな我が子に平穩に授乳できるし

緑は天空が屋根の彼の寢床で揺すられ

木々の葉が頭上で触れ合い 子守歌をさらさら鳴らす。

しかも見たまえ、原初の森の中で跳いている

ぞっとする肉体アリスの悪臭を放っている大群の真只中に

新しく不思議な生き物が誕生しているのを、

狂暴で―口籠くちかごっていて―名無しで―恥知らずで―裸で、

欲求に拍車をかけられ、恐怖に制圧されて

彼は荒涼たる洞窟どうくつに頭を隠す。

殆ど地上の同類から保護されない

彼の生存のための闘いは甚だ無駄に終りそうだが

自らの五感を鋭くして遂には己の頭脳がうの

薄明の迷路の中に

子宮の内部の胎児のように

思考が触手を 暗闇の中に押し進めてゆく。

そしてゆっくりとその宿命的な進行のうちに

それは無意識となり、遂には

そのどうしようもなくなくなった未開人は敢えて真向かうこと

になる、

身も毛もよだつ力を揮ふるって 洞穴ちうけつ熊くまに、

その嵩張った筋力よりも強くなろうと

彼は 使うことで増してゆく力を 感じるのだから。

一時代から言葉にならない無数の時代へと

幽かな徐々の変化によって長くゆっくりと

彼は段階を追って到達してゆく、

恐怖と飢饉、幸福と不幸を 抜けながら

そして危険に取り囲まれながら依然として

自分の生命を技術と技能によって引き延ばすのだ。

手を巧みに使って彼は火打ち石を形作る、

彼は不思議な工夫をして角つのを刻む、

彼は 抵抗する石塊を努力しながら

断ち割る―遂にある日 飛び出すのだ

その石から外へ 火の閃光が、

世界を自らのものものにすることになる火が。

(二三九―四〇)

ABABC Cの型で押韻する八音節詩行六行の十連から成る計六〇行の作品で、原始の類人猿から火を作り出せる人類への上昇の姿が、実に生き生きと活写されて感銘深い。前拙稿 (pp.56―59) に、ピーター・ハウの同題の作品

があった。

次に、ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジ卒で法廷弁護士だった英国の詩人・歴史家トマス・ソーネリー (Thomas Thorneley, 1855—1949) の作品を二篇読もう。

原子 The Atom

我々には全く分らない どうすれば物質の原子内に閉じ込められているエネルギーを引き具で制御できるか。もしそれが思いのままに解放されたりすれば、我々は経験することになるだろう、穏やかにゆったり取まつてはいるものの、突然破裂する高性能爆薬に伴っている暴力を。

サー・オー・ロッジ

収監されている力を目覚めさせるな 汝の中に

知られずに あるいは幽かに推測されながら眠っている力を！

汝の恐ろしい秘密を〈自然〉は保持し、

柵で囲っているのだ、人目を忍んで科学が這い寄りながらあの包圍されている神秘へと向かつてゆく時。

尤もだろう 彼女が身を乗り出し破れかぶれでその大胆な攻囲者たちを押し戻そうと努めても、もし彼らがその砦を勝ち取るならどれ程身の毛もよだつような死と苦痛の姿が彼らの進路に現れ続くことだろうか！

あの闘争する原子たちが揮う力を

人間はこの上なく罪深い目的に向けてしまった。

忽ち驚くべきことが顛あらかになった

大地は赤い戦場で炎となつて燃え上がる、

あの教訓さえ学ばれることはなかったのだ！

汝の最後の絶対の秘密を、〈自然〉よ！ 守ってくれ、

増やさないでくれ 人間の騒然たる災いを、

戦争と憎悪が眠りに就くまで、

埋めておいてくれ あの容赦なく恐ろしい戦力を深々と、

汝の原子の中に静かに休息しているままに。

(二四四—四五)

訳注

(一) Sir Oliver Joseph Lodge, 1851—1940. 英国の物理学者

原子が内包する恐るべき力に、改めて素朴・直截に警告を發する作品。八音節詩行五行が A B A A B の型で押韻する四連（但し第一連一行目は十音節、第二、第三連の一行目は九音節）の作品。もう一篇同じ作者の詩である。

先祖に想い巡らす釣り人

The Angler on His Ancestry

我らは自分の鱗を多くの海でさつと動かした
靈アイオン体を求めて 地上で生きたいと

感じる以前に。今、ここで我らは
さつと各々の毛鉤を動かしている、魚を罾にかけようと。

我らは多くの木々で飛び跳ね回った

何年もの間 我らが自分の姿を変える前に、

そして愛想のよい（チンパンジー）を去って
首位の靈長類としての地位を占めた。

そして今や我らは何とか切り抜けてきた、
自分たちの出所を忘れるのではないかと恐れながら、
一つの先祖は我らの動物園に、
そして一つは我らの水族館にいる。

(二四五)

水陸両方における先祖に思いを巡らす釣り人の述懐という体裁の面白い掌篇詩。A B A B の型で押韻する八音節詩四行三連から成る。尚第一連二行目の「靈体」(aeons)は、「グノーシス主義」(Gnosticism)「秘教的な叡智」によって救いを得るとした思想」での、至上存在より流出し、宇宙の運行の種々の機能を果していると考えられる力・存在を、ここでも指しているのだろう。

この詩華集にはアメリカの国民詩人口バート・フロスト (Robert Frost, 1874—1963) のソネット一篇も採られている。それを見てみよう。

何故科学を待つのか Why Wait for Science

皮肉な（科学）、彼女なら知りたがるだろう、

自らが満足しながら怖れを媒介として

我らがここからどのようにして離れ去ろうとするのかを、
彼女が事物を作ったせいで我らがいなくなったり

消し去られねばならなくなった時に。彼女は求められるの
だろうか

我らに示すようにと　ロケットによってどのように我らは
向かってゆけそうなのかを、彼女のどこか、そう、半光年
離れた星へと、絶対零度の温度の中を？

何故〈科学〉を待つのか　その方法を与えるのに
今　どの素人にもそれが分るといふのに？

離れ去る方法は同じである筈だ

我々が出現した五千万年前と――

もしも誰かが　その有様を思い出すなら。

私には或る理論がある、が　それには殆ど理論はない。

(二四九)

訳注

(1) absolute zero　熱力学上の温度、絶対温度目盛での零度。
考えうる最低の温度でセ氏マイナス二七三・一五度

科学へのある疑念・不信感が、科学万能のような風潮に
なつてゆけばゆく程表れるのは当然であり、正常な状況で
ある。十音節詩行が A B B A A B B A C C D D E E と押韻す
る。フロストの八冊目の詩集 *Steeple Bush* 『金露梅』(1947)
に収録された。

兄弟の作品がある。まずジュリアン・ハックスリー (Sir
Julian Sorell Huxley, 1887—1975) のを二篇見てみよう。英
国の生物学・遺伝学者で、ユネスコの初代事務局長を勤め
た。行動・進化の研究で著名だが、文筆にも長じていた。

或る踊り手へ To a Dancer

うんざりだ　何マイルもに　大地のあらゆる拡がりに、
ある場所と別の場所とを取り替えることに、
嫌になる　驚嘆すべき発明だという風説に、
時間と空間は縛りながらも人間を自由にしないのだから、
うんざりだ　とほとほ歩きの科学に、⁽¹⁾そこでは見通しが
達成されるためには人間母体の土に包まれなければならな
いし、

一日一日絶えず事実に事実を重ねるしか
修正不要の完全さなどないのだから。

——私はうんざりだった こういうのにそして更にもっと
すると君がやって来て

踊ってくれたのだ 月に照らされた草の上でこの小さな町
のために。

君は私たちのために踊ってくれた、それで尚も私には見え
るのだ 君が

踊っているのが 私の心の中で、生きている物として、う
っとりさせるのだ

四肢の肉体を、どの日の行動も、
散漫な思考と 情緒の無駄な遊びを、

うっとりさせるのだ あらゆるものを そしてその多くを
一つにするのだ。

——奇跡が起きる、華々しい策略が為される。

一瞬の裡に《生命》が、完成されて崇高に

躍動するのだ 君の踊りによって彼方に時を越えて。

何故なら芸術が、愛や幻像同様、編み上げて我らの

荒削りな散らばったままの事実と行為の数々を一つの生命

へと再生させるのだから、

一つの生命が統一の取れた火の中に再生され
完成されて 世界の欲望を抑えた全体となるのだ。

(二五五—五六)

訳注

(1) *clothe* itself in clay 'clay' 「土」、人間の天稟、天性、
資質

研究の停滞などでうんざりしていた時に、町にやってき
て魅了させてくれた或るダンサーの芸を讀えた二十二行の
佳作で、最初の八行は A B A B C D C D と押韻し、その後
の十四行は二行連句、大方は十一音節行でそれに十音節行
が混ざっている。彼のもう一篇、軽妙な短詩を見てみよ
う。

宇宙の死 Cosmic Death

死んだことで月は寄せ集められた

ずっと以前に、ああ ずっと以前に、

それなのに今もその銀色の死骸は回転しなければならず

他者の光で輝かねばならない。

彼女の凍りついた山々は忘れねばならない

それぞれの原始の熱い火山の息を、

まだ何年も長らく軌道を回る運命にあり

空席のままの死の円形劇場なのだ。

そして全て宇宙の空の囲りは

我らの青色の彼方に横たわる暗黒で、

死んだ星々が数限りなく横たわり、

赤く憤った色合いの星々は

死んではいけないが死ぬ運命にあるのだ。

(二五六)

八音節詩行の八行と五行の二連から成り、第一連は

ABABCD CD と、第二連は E F E F E と押韻する。実

に自然な技巧が発揮されたこの二篇の詩の作者の実弟こ

そ、我々文学の徒なら誰も知らない者のいない英国の小説

家・批評家オールダス・ハックスリー (Aldous Huxley、

1894—1963) である。その彼の掌篇詩を次に見てみよう。

第五哲学者の歌 Fifth Philosopher's Song

百万の百万倍個の精子、

彼らは皆 生きている、

哀れにもノア一人しか 彼らを襲った大洪水から

敢えて 生き残る望みを 抱くものはない。

そしてその十億から引いた一つの中に

ひよっとすると偶々 現れたのかも知れない

シェイクスピアが、別のニュートンが、新たなダンが――

が その〈一個〉が〈私〉だったのだ。

こうして君たち優秀なものを追い払ってしまったのは恥さ

らした

他のものを外に置き去りにしたまま方舟に乗ってなど！

我々皆には一層良かったのだ 御し難いホムンクルスよ、

君が静かに死んでくれてさえいたら！

(二六六—六七)

ホムンクルス (Homunculus) とは、十六〜十七世紀の

医学の説でいう、精子の中に宿ると考えられていた微小人体である。「第五」というのは、別に五番目という意味というよりは、それまで存在した(であろう)哲学者の歌とは異なった新たな、の意であろう。如何にもこの小説家らしい機智に富む諷刺の効いた小品である。A B A B の型で押韻する四行詩三連から成る。最初の二連の奇数行は十音節、偶数行は五音節、最後の第三連の音節数は順に 9 11 12 6 となっている。

次に、スコットランドの詩人・評論家の作品を取り上げよう。ヒュー・マッククディアミッド、別名クリストファー・マレー・グリーヴ (Hugh MacDiarmid / Christopher Murray Grieve, 1892—1978) の詩である。同郷の四人の文章をエピグラフ(題辭)にして特色を示したものの。

スコットランド人の仲間二人

Two Scottish Boys⁽¹⁾

ターバイ⁽²⁾はオルフェウスのような音楽によって建てられたばかりか、何か靈感を吹き込まれたオルフェウスの音楽

無しではどの都市も建てられなかったし、人間が誇れる仕事はどれもこれまで成し遂げられはしなかった。

トマス・カーライル⁽³⁾

詩の精髓そのものは真実なので、言葉が真実でなくなるやそれは詩でなくなる、尤もその脱ぎ棄てられた衣服は着ているかも知れないが。

ジョージ・マクドナルド⁽⁴⁾

詩は決して君を裏切らない。出来る限り多くの作品を覚えなさい。言葉が自ずから出てくるようになるまで繰り返し繰り返し復唱しなさい。そうすれば盗まれたり壊れたり喪くなったたりしない喜びを、いつまでも享受することでしょう。これは全ての指にはめたダイアモンドの指環より遙かに素晴らしいものです。……発見への道を示している指先、それを記憶としてしまっておく整理箱は存在し得ないのです。

パトリック・マンソン⁽⁵⁾卿

〈科学〉は心の〈微分学〉であり、〈芸術〉は〈積分学〉

である。この両者は離れている時は美しいかも知れないが、結合された時にのみ最良・最大のものとなる。

ロナルド・ロス卿⁽⁶⁾

スコットランド人の仲間二人がいた、一人は海辺や丘を彷徨って

多くの素晴らしい景観の美に酔っぱらい、
遂に自然の栄光の中に霧の中でのように迷いこんで

自らを混沌の中に投げ込んでしまった、〈影の谷〉のバニヤンの泥沼⁽⁷⁾の中のように。

もう一人は父親の農場で 瘦せた 獯猛な猫を
撃った拳句 深く興味を抱いたのだった

その内部の仕組を屋根裏の自室の奥まった所で
精しく調べていて見つけ出したサナダムシに、

——「現れてくる前兆への序詞」だ！

というのも前者がもたらしたのは 他ならぬ唯の大袈裟な

無意味、

最悪の描写という精神の自慰 にしかすぎなかったのに

後者からはその後の年月次々に私は見たのだから

英雄的な行爲を、無限の優れたエネルギーの放出力とその
実践を、

偉大な実用になる想像力と 〈神〉のような徹底ぶりを、
そして知識の詰った強大な仕事、疲れを知らない労働、

熟練した技術、高度な寛大さ、そして不滅の〈名声〉を、
途切れることなき奴隷根性一掃の運動を、

止むことなき月並みと伝統的な不動性を、
その結果ヨーロッパの理性が後方へ沈み込んで もはや

遙かな昔に信奉されていた超自然的なものへは戻らないよ
うにと……

サント＝ブーヴ⁽⁸⁾は正しかった——我々が最も必要とする特
質は

(就中 感傷的なスコットランドでは) 全くのところ

「科学、観察魂、円熟、力量、
多少の厳格さ」であり、詩人たちは、ギユスターヴ・フロ

ベール

(あの傑出した医師たちの息子であり兄弟) のように、練
るのだ

各々のペンをこれら彼らの外科用メスのように、それで彼

らの仕事は

どこにあっても 我々に解剖学者と生理学者を想起させる
ことになるだろう。

詩人とそれ故科学者は後者、他方 前者は、
およそ科学者ではないし、しかもどうしても値打のない詩
人であった。

(二六四—六五)

訳注

- (1) 'Fiona MacLeod' (William Sharp) [1855 or 6—1905, ス
コットランド生れの詩人・小説家・批評家、本名と筆名
の両方でシェリー伝、ハイン伝、詩集を、筆名で小説や
劇を書いた]と「以下の(5)の」Sir Patrick Manson
[1844—1922, 雅称は「熱帯医学の父」、スコットランドの
寄生虫学者、「マンソン住血吸虫」「マンソン裂頭条虫」
の発見者(原著注、三三三)、「」内は当筆者
- (2) Thebes 古代ギリシャのBoeotiaの都市、アテネと敵対
した、アレキサンダー大王によって滅ぼされた
- (3) Thomas Carlyle, 1795—1881, スコットランドの歴史学
者・批評家『衣裳哲学』*Sartor Resartus* (1833—34)
- (4) George MacDonald, 1824—1905, スコットランドの小説

家・詩人 'The Princess and the Goblin' (1872) の作者

- (5) 上記の訳注(1)の後半参照
 - (6) Sir Ronald Ross, 1857—1932, スコットランド出身の英国
の熱帯病学者、ノーベル生理学賞(1902)。前回の本誌
第二三二号三二—三三ページに二篇の詩が掲載済み
 - (7) Bunyan's quag John Bunyan (1628—88) *The Pilgrims'
Progress* (1678, 1684) 『天路歷程』に描かれる底なしの沼
への言及、(「死の影の谷」を貫く径の一方は、不注意な者
は落ち込む沼になっていた(原著注、同))
 - (8) Charles Augustin Sainte-Beuve, 1804—69, 多彩多産なフ
ランスの批評家。一八五七年五月四日の、フロベールの
「ボヴァリー夫人」論の最後に出てくる句がフランス語原
文で引用されている。"Science, esprit d'observation,
naturalité, force, / Un peu de dureté" 『月曜閑談』
Causeries du lundi xiii (Paris, Garnier Frères, n.d.) (同)。
[p.363] この詩のフロベール以下の三行は「サント＝ブ
ヴ」の文章の英訳になっている。尚、フロベールの父親は
市立病院の院長を務める高名な外科医であった。
- 大変面白い自由詩で、九行、十八行、二行の三連から成
る。最終行での酷評は、科学精神称揚上の逆接表現と受け
取りたい。この詩華集の中でも目立つ作品である。
最後に米国のユタヤ系詩人・小説家ハワード・ネメロフ

(Howard Nemerov, 1920—91) の作品を三篇見ておきたい。

非科学的な補遺 Unscientific Postscript

存在する 世界が、夢が、そして一つの法則が。
希いが、叡智が、そして事物が在るがままに。

洞窟の内部で 燃え上っている太陽光が示していた
一つの翳と その光と翳との間の幾つもの形態を、

^{リアル}真物でも偽物でもなく信仰にも左右されず、
肉が取り除かれているとすれば骨もなく、生命も

死も明瞭な観念も 求めていない。しかし生きているよう
に反応し、複合しており、さらさら光っている表面の

輝き、オーケストラの閃光を 備えている。

それは信ずることではない、あの愛とか恐怖を

あるいはそれらの最も深遠な定義である 死を、

しかし十分にオーケストラが受け容れるように

答は出している、たとえ哀歌にしろ、

規則的な調子の踊りで 楽器全体を働かせて。

(二九三)

標題は、ゼーレン・キルケゴールのエッセイ、「非科学的な補遺」からだと原著注(三三四)がある。一八四六年刊行のそれであろう。それに触発されての作者の、思索の具象化作品として読者に瞑想を誘う。十音節二行ずつ七連の詩で第五連 (Flare, fear) 、第七連 (lament, instrument) の押韻以外は無韻である。

宇宙漫画 Cosmic Comics

空間に小さな黒い穴が一つある

そこを通って、と我らの天文学者諸氏は言う、

丸ごとこいつ、宇宙が、

ある日落ちてくるに違いない。それで万事休すと。

彼らは自らの萎縮のせいで想い起せないのだ

こういう終末論的な夢が

練り上げられるのは もっと卑小な主題に

陶器製便器、(生ごみ粉碎機)に 関してなのだ。

〈国王手元金〉からの賞金で

〈終極の衛生〉に報酬を払ってもらおう 現状から
生きとし生けるものをどっと洗い流してくれたのだから。

モーセが〈神〉の御座席を見た所⁽¹⁾に

科学は 唯 異様にみえるものを見たのだった

宇宙の尻の穴を。

(二九三―九四)

訳注

(1) Exodus xxxiii:23. ネメロフ自身の注。「出エジプト記」

三三三章の最後の辺り(二二―二三節)で、主はモーセに
言う、「見よ、一つの場所が私の傍らにある。その岩の上
にあなたが立てば、私の栄光が通り過ぎる時私はその岩
の裂け目にあなたを入れて私の手であなたを覆う。私が

手を離す時あなたは私の後ろは見るが私の顔は見えない」

(2) asshole はきだめ、汚い場所

八音節詩行が A B B' A C D D C B' E E F F B' と押韻
する鋭い洒落た十四行詩。

物を見る(1) Seeing Things

私がこれまで物を見るのに近づいた時に似ているが

物理学者たちの 物は実在するという言葉の方は

ある夏の夕方 サドベリー湿地⁽¹⁾で露^{あちわ}になった、

その時太陽を背に 影絵となった一本の木が

私が突然見たところでは 燃えているようだった、

黒い沸騰している煙がその全貌を形作った。

双眼鏡が暗号と化した光景を変えて

あの煙は雲なすブユ⁽²⁾だと明らかにした、

何百万匹という彼らがあのように一様にぐらつかずに踊っ

ているのだ

その多勢の動きによって一つの形状が

不変となり二つの形姿となつてそのまま留まっているので私には見えるのだと思つたのだ、火と木が。

その仮面を打ち貫けか？⁽³⁾ 君は別の仮面を見つける、忠実に映す鏡は類推によつて

眼に見えるようになる。私は凝視した 更に大きな夜の煙が別の煙を飲み込んで目立っていくのを
コンコードから海へと曲がりくねつて下つてゆく
何百という隠れた流れの中の沼地の上に。

(二九四)

訳注

- (1) Sudbury Marsh マサチューセッツ州のコンコードへと北流するサドベリー川によつて形成された同州のサドベリーの東の沼地(原著注、三二四)
- (2) gnats 双翅類の吸血性の小昆虫、ユスリカ、ヌカカ等
- (3) Strike through the mask ネメロフはハーマン・メルヴィルの『白鯨』三十五章「三十六章の誤り」の「後甲板」に言及している(原著注、同)。この句は、エイハブ船長が水夫一同を後甲板に集めて、白鯨を仕留めようと一大気焔をあげる場面(Hendricks House 註, pp.161-62)で

の、彼の台詞に出てくる

「物を見る」ということについて、作者のある時の実体験を詳細に辿りながら、具体的に思索した報告の詩で、殆ど十音節の詩行六行の三連から成る。押韻なしの詩。ネメロフの三篇いずれも内容の奥深い秀作ではなからうか。

ネメロフの言及によつて浮上した『白鯨』のエイハブ船長はあの場面で豪語した。目に見えるものはボール紙の仮面だ、目に見えない真理の正体は仮面の背後から姿を現わすのだから、人間何かを為し遂げるには、仮面を打ち貫けだ(Uf man will strike, strike through the mask)。仮面を打ち貫く、これこそ、科学の、そして詩の、使命なのである。

詩華集『科学の詩』の中の優れた諸作は、それぞれ、目に見える(仮面)を様々に打ち貫いて、その背後に隠れている目に見えない真相を暴き出そうとしている姿を見せ続けている。

拙訳での(へ)付と、ゴチック体は、原詩では各々固有名詞以外の大文字で始められる語句と、イタリック体である。